

大阪大学  
日本語・日本文化国際フォーラム 2015

基調講演  
日本語学と日本語教育

長谷川葉子  
カリフォルニア大学バークレー校

2015年3月13日

大阪大学日本語日本文化教育センターでは、過去に数回、米国における日本語教育に関する講演をさせていただいているが、今回は、私の専門である日本語学からテーマを選ぶよう依頼を受けた。丁度、昨年末（2014年12月）にケンブリッジ大学出版から *Japanese: A Linguistic Introduction* という本を出したところなので、その中から一章を選び、お話をさせていただくことにした。この本には、日本語教育に関わる方々が特に興味をお持ちだろうと思われる章が多く、かなり迷ったのだが、最終的には、第19章の「スピーチアクト」（言語行為）を選択した。まず、「スピーチアクト」とは何かを説明し、その後、日本語社会が取り分け面白い特徴を示す、「謝罪」、「拒絶」、「感謝」、「命令」、「誘いと依頼」、「賞賛とその受け答え」について考察してみる。

## 1. 言語行為とは

もし、誰かに「あなた、友達いないでしょう」と問われたら、どう答えるだろうか。勿論、字義通りの意味は明瞭だが、適切な応答をするためには、それだけでは十分ではなく、話し手がそう言うことによって、何を達成したいと考えているのかを推測する必要がある。恐らく、多くの人がまず頭に浮かべるのは、話し手が聞き手の行動に憤り、そのような行為をするのであれば、当然、誰からも好かれない、従って友達はいないであろうと侮蔑している設定だろう。もし、聞き手がこの発話をそう解釈すれば、「随分失礼ですね」とか「あなたもでしょう」などと返答するだろう。

しかし、話し手の表情や口調によっては、軽い冗談と受け止めるのが妥当な場合もあるし、質問の意図は、単純に、聞き手に友達がいるかどうか知りたいだけだという解釈も、必ずしも不適切とは言い切れない。とは言っても、その場合でも、聞き手は、何故話し手はそれを知りたがっているのかということが分からない限り、返答し難いだろう。この例が示すように、表現された文を逐語的に理解できただけでは、よどみのない会話は成り立たない。

この事象に関し、ジョン・オースティン (Austin 1962) は、伝達目的で言語が使用される場合、三種類の行為が同時に遂行されるという分析を提案した。一つは、「発話行為」(locutionary act) で、発話することにより、その字義通りの意味を伝達することを意味する。二つ目は、「発話内行為」(illocutionary act または illocutionary force) で、これは、話し手が発話によって達成を目論む行為である。一般に「スピーチアクト」と言う場合、「発話内行為」を指す場合が多い。以下に例を挙げる。

- (1) 挨拶、感謝、主張、伝達、確認、助言、注意、同意、反論、謝罪、弁解、賞賛、祝福、請求、受諾、辞退、却下、非難、容赦、招待、命令、許可、禁止、約束、質問、返答、依頼、等々

発話内行為にはある種の強制力があり、従って、illocutionary act よりは illocutionary force という方が相応しいと言える。例えば、人に時間を聞かれたが答えられない場合、「ごめんなさい、ちょっと分かりません」のように、詫びの表現を加える人が多い。これは、差しさわりのない限り、質問されたら答える義務 (force) を感じるためである。この義務感が発話内行為の強制力である。

三つ目は、「発話媒介行為」(perlocutionary act または perlocutionary effect) と呼ばれ、発話が聞き手に及ぼす心理的効果を意味する。例えば、

- (2) 楽しませる、悲しませる、思い出させる、気を散らさせる、怖がらせる、納得させる、イラつかせる、勇気付ける、諦めさせる、呆れさせる、がっかりさせる、等々

であり、これは自発的な行為と言うよりも発話行為の効果 (effect) なので、perlocutionary effect と呼ぶ方が適切だろう。発話媒介行為は聞き手の解釈、判断に因るものなので、話し手が意図する発話内行為とは必ずしも一致しない。例えば、冗談のつもりで「あなた、友達いないでしょう」と言ったのに、聞き手を甚だしく傷つけてしまうということもありえる。このように、文の抽象的な意味と、話し手がその発話によって達成したいこととの間には開きがありえるし、同一の文が様々な発話内行為を達成するために使われるため、話者同士の誤解に繋がることもまれではない。言葉を使うことの危険な側面である。

発話内行為には、普通、「好ましい対応」と「好ましくない対応」がある。例えば、「申し出」という発話行為に対しては、「受諾」と「拒否」があるが、受諾は好ましい対応、拒否は好ましくない対応となる。「提言」に対しては、「賛同」は好ましく、「反対」は好ましくないし、「依頼」に対しては、「承諾」と「拒絶」が同じような関係にある。好ましい返答をする場合は、率直に言っても差し障りはないが、望ましくない対応をする際には、相手を過剰に傷つけない為に、回避的な工夫が必要となり、異文化間の

差も顕著となり易い。

異言語・異文化間のコミュニケーションでは、適切な解釈をするのが取り立てて難しいことがある。例えば、1969年、日米間の繊維製品を巡る貿易摩擦緩和交渉の為、時の佐藤栄作首相がニクソン元大統領をワシントンに訪問した。ニクソンは、日本の輸出自主規制を強く求め、佐藤は、「善処します」と答えた。ニクソンはこの返答を「確約」だと解釈した。しかし、日本の繊維製品の対米輸出は一向に減少せず、ニクソンは佐藤を「嘘つきだ」と罵った (Haberman 1988)。日本社会では (特に政治的発言に於いては)、「善処します」は、「まあ、やってみますよ」程度の当てにならない答えだと解釈されるのが普通である。

## 2. 謝る

「謝る・詫びる」とは、話し手が自分の行為の非を認め、それによって傷ついた、聞き手との人間関係を修復、保持する為に行う言語行為を意味する。話し手は、聞き手の感情を損なった原因となる行為の深刻度、聞き手との関係や親密度、年齢差等の要素に鑑み、発話形態や内容を選ぶ。人の感情を損なうとされる行為の深刻度は、文化によってかなり基準が違う。例えば、「約束の時間に遅れる」という行為は、日本社会ではかなり深刻な過失だが、世界の多くの国では、瑣末な落ち度に過ぎないと言われている。

謝罪の表現方法としては、以下の五種類が一般的である (Blum-Kulka and Olshtain 1984)。

- (3) a. 「スピーチアクト指示語」を使う (すみません、ごめんなさい、お許してください)
- b. 責任を認める (全て私の責任です、私は本当に忘れっぽいもので…)
- c. 原因を説明する (バスが遅れたものですから…、朝は渋滞がひどくて…)
- d. 償いを約束する (賠償させていただきます、できる限りの償いはします)
- e. 不祥事が再発しないことを約束する (この様な不始末は二度と犯しません)

(3b-e)の場合は、「すみません」等の詫びの常套句を伴うのが一般的である。また、原因を説明することによって詫びる場合は、文の最後をぼかすのが望ましく、完結した文にすると、詫びではなく、言い訳のように聞こえてしまう。

よく、日本人は、頻繁に、しかも謝る必要のないと思われるところで謝ると言われる。例えば、日本文学の翻訳で知られる、エドワード・サイデンステッカーは、谷崎潤一郎の『細雪』を訳す際に、その中の一文、「失礼でございますけれど、相良さんはどちらにお住まいでいらっしゃいますの？」に現れる「失礼でございますけれど」は訳さなかった。英語話者は、総じて、住所を聞くことが失礼になるとは考えないので、このような場合、“it’s rude to ask you, but …” といった表現はめったに使われな

い。従って、原文に忠実に翻訳すると、馬鹿馬鹿しく聞こえてしまう。どうしても「失礼でございますけれど」を含みたいならば、“May I ask where you live?” で充分である (Seidensticker and Nasu 1962: 67)。

しかし、日本社会は、プライバシーに非常に敏感で、聞き手の名前、職業、家族構成、住所等を尋ねることは失礼だと見なされることが多い。欧米社会でも、年収等の重要な個人情報に関して問うことは失礼に当たるが、日本では失礼と見なされる範囲が欧米社会より広い。従って、プライバシーに抵触しそうな場合は、とにかく謝るという習慣がある。つまり、日本社会では、欧米社会に比べると、「個人的情報の価値が高い」ということになる。

通常は、聞き手が知っているだろうと思われる情報を得たい場合、話し手は、差しさわりのない限り、聞き手が教えてくれることを期待する。Grice (1975) は、これを「協調の原理」と呼んだ。例えば、「今何時ですか」と聞く場合、相手が時間を知っている限り教えてくれるだろうと期待するのは、ごく自然である。相手が答えてくれない場合は (例えば、「〇〇さんの就職活動はいかがでしたか」や「〇〇さんはご病気ですか」に対して)、話し手は ① 質問が失礼だと受け取られた、② 聞き手は、答えることは軽率な行為だと考えている、③ その情報を流すことは聞き手の道義に反する、④ 誰かに迷惑が及ぶ、等の、根底となる理由を想定し、答えが返ってこないことを納得しようとする。

ところが、アフリカの南東にある島国、マダガスカル社会では、住民は、頻繁に、意味なく不十分だと考えられる返事をするのだそうである。例えば、「お母さん、今どこにいるの?」と聞かれた場合、家にいるとはっきり分かっているにも関わらず、「家にいるか、市場にいるよ」等と答える (Ochs Keenan 1976: 70)。このような、故意になされる曖昧な返答は、情報の希少さに拠るものだろうと考えられている。マダガスカルの村では、新しい出来事はめったに起こらず、珍しい情報を得た者は、それを他者と共有したがるらないのである。

これに反して、今日の日本社会は情報が溢れているが、19世紀末までは、殆どの人々は、一生、自分が生まれた村を出ることはなかった。たまに巡ってくる行商などから聞く話はとても貴重だったのである。従って、マダガスカル社会と日本社会が多くの相似性を持っていても不可思議ではない。例えば、両社会の共通点として、会話中に個人の名前を明かさない、一生の中、何度も名前を変える、二重否定 (~なければならぬ) のような、回りくどい表現を好む等々が挙げられる。情報は貴重だという潜在意識があるので、日本人は、今でも、それをよこせと言うのは失礼に値するのではないだろうか。

### 3. 断る

「断る・拒絶する」というのは発話内行為に対する、最も望ましくない対応の一つであるため、直接的表現（「お断りします」等）はまれであり、以下の方便が広く用いられている（Beebe et al. 1990: 73）。

- (4) a. 遺憾の意を示す（すみません、本当に心苦しいのですが…）
- b. 希望を述べる（ご協力できたらいいのですが…）
- c. 言い訳する（今日は子供が早く帰ってくるものですから…）
- d. 代案を示す（山田さんに聞いてみたら？）
- e. 拒絶の条件を提示する（もう少し早くおっしゃってくださったら調整できたのですが…）
- f. 将来の快諾を約束する（次は必ず都合をつけますから…）
- g. 一般的な信条を述べる（友達とはビジネスはしないことにしてるから…）
- h. 原理を示す（石橋は叩いて渡れって言うから…）
- i. 相手を思い留めさせる
  - 罪悪感を抱かせる（ウェイトレス：コーヒー一杯で粘られてしまうと、営業が苦しくて…）
  - 依頼を批判する（自分を誰だと思ってるの？）
  - 共感を乞う（私もとても苦しくて…）
  - なだめる（そんなに心配しなくてもいいんじゃないの？）
  - 自己弁護（もう既に精一杯やっているんですよ）
- j. 明確な拒否は避ける
  - 言語外：沈黙、その場を立ち去る
  - 言語使用：話題を変える、冗談を言う、答えを延期する（考えてみます）、うやむやにする（ええ？ そんなこと言われても分からない）

母語の習得を通して身に着けたスピーチアクトへの方策が外国語の運用時にも応用されることを「語用論的転移」(Pragmatic Transfer) と呼ぶ。Beebe 他 (1990) は、「依頼・誘い・申し出」を拒否するという設定のロールプレーを完成するテストを用い、① 日本語母語話者が日本語で対応する場合、② 彼らが英語で対応する場合、そして ③ 英語母語話者が英語で対応する場合を調査し、語用論的転移が多発することを実証した。この研究は、聞き手を目上の者、同等な者、目下の者に分別し、「拒否」という望ましくない対応をする際の発話内容の分析、内容の順序と頻度を比較した。例えば、夕食への招待を断る場合、英語母語話者が目上、または目下の者に答える場合には、肯定的な感情の表現 (thank you, I'd love to go)、次いで遺憾の表現 (I'm sorry)、そして理由 (but I already have plans) という様式が典型的だった。しかし、同等な者に

対しては、最初の感謝の表現は省かれることが多かった。

これに対し、日本語母語話者は、日本語使用の場合でも英語使用の場合でも、目上の者に対しては、遺憾、そして理由という配列が標準的であるが、目下の者に対しては、単刀直入に断ることが多かった。また、日本語母語話者は、日本語でも英語でも、代案を提示することが往々にしてあるが、英語母語話者の対応には、この方策は全く見られなかった。

また、日本語母語話者は、断る場合、質問を返すことが多く、これは英語を使う場合にも転移されることが確認されている (Lee 1998: 154-55)。ここで使われる質問は、相手がそのような依頼をすることに対する批判と、説得力のある拒絶理由を見つけ出す為の時間稼ぎに使われる。

(5) A: 悪いけど、今晚残業してくれない?

B: え、今晚ですか?

(6) A: 講義のノート貸して。

B: どうして?

#### 4. 感謝する

日本語では、「感謝」のスピーチアクト指示語である「ありがとう (ございます)」に次いで、感謝に伴う恩義から派生する、「詫び」の表現も頻繁に使われる。

(7) a. お心遣い、恐れ入ります

b. [ペンを返しながらか] どうも済みませんでした

c. [ケーキをくれた人に] 悪いわねえ

d. [家具を移動してくれた人に] ごめん!

しかし、言及されている行為に聞き手が直接加担していない場合には「(お心遣い) 恐れ入ります」以外の詫びの表現は使えない。例えば、以下の発話に対応して「すみません」や「ごめんなさい」は奇異に聞こえる。

(8) a. ご卒業おめでとうございます

b. お元気になって、よかったですね

c. よいご旅行を!

また、恩義の度合いが極端に高い場合 (例えば、山で遭難し、救助された場合) は、「ありがとうございます」は適切だが、「すみません」等の詫びの表現は相応しくな

い。

## 5. 命令する

「命令」とは、聞き手が自主的には行わないであろうと思えることを強いる発話である。英語では、「提言」や「忠告」にも命令形が頻繁に使われるが、日本語では、命令形の使用は、極めてまれである。これは、日本語の命令形は、非常にきつい表現であり、使える状況はかなり制限されるためである。例えば、職場の上司が、具合が悪そうな場合、英語では、命令形 (Go home!) を使っても失礼にはならないが、日本語では、「帰れ」または、「帰りなさい」(尊敬語「なさる」の命令形)とは言えない。「お帰りになったら、いかがですか」といった、相手の意思を尊重する柔軟な表現が適切である。日本語では、命令形は、話し手が聞き手より目上であり、聞き手の行動を言語行為によって束縛することが社会慣習上妥当だと認められている場合に限られる。

他の例としては、マニュアルやレシピ等では、英語では命令形を使うが、日本語では非過去形を使うのが標準となっている。

- (9) a. 次にモニターを繋ぎます (#次にモニターを繋げ)
- b. 煮立ったら、塩を加える (#煮立ったら、塩を加えろ)
- c. 使用後は、必ず、プラグを抜くこと (#使用後は、必ず、プラグを抜け)

日本語では、単純な過去形、現在形で命令することも可能である。

- (10) a. どいた、どいた!
- b. 直ぐに食べる!

話は少しずれるが、五段活用動詞の中で、「帰る・作る・入る」等のように終止形が「る」で終わるものの否定命令形(禁止)は、くだけた発話の場合、アクセントでのみ分別される同形となり、日本語学習者が正確に理解するのはかなり難しい。

- (11) a. 帰るな    帰るな    →    帰んな
- b. 作るな    作るな    →    作んな
- c. 入るな    入るな    →    入んな

「命令」という発話行為は、話し手と聞き手の力関係によって妥当かどうか決まるものなので、言語表現自体は、それ程重要ではない。従って、話し手に、聞き手の行動を規制する権力があれば、「辞めていただきます」のように、通常は依頼の表現である「～ていただきます」で命令することも可能である。

## 6. 誘いと依頼

「命令」と同じように、「誘い」(invitation)も「依頼」(request)も聞き手の行動を促す発話行為であるが、聞き手が断る権利、資格を有する場合は、「誘い・依頼」として理解される。専門用語として使われる際には、「誘い」は「助言・提言」等も含む。両者の違いは、誰が利益を得るかであり、「誘い」(例えば、「コーヒーどうぞ」)では聞き手が利益を受けるが、「依頼」(例えば、「そこでお待ち下さい」)では話し手が利益を受ける。

英語では、誘いにも依頼にも同じ表現が使われる。

- (12)a. Please sit down
- b. Will you sit down?
- c. Would you like to wait here?

一方、日本語では、「誘い」と「依頼」とでは、異なる表現が使われる。「～て下さい」は「誘い」にも「依頼」にも使えるが、「どうぞ」は「誘い」にのみ、「すみませんが」は「依頼」にのみ使用される(Himeno 1991)。従って、「どうぞ、座って下さい」は、椅子を勧める場合等、「すみませんが、座って下さい」は、例えばスクリーンが見えない等の理由で聞き手に座ってほしい場合に使われる。

日本語学習者は、「～て下さいませんか」は「～て下さい」のより丁寧な表現だと教えられることが多い(Himeno 1991: 76)。しかし、「～て下さいませんか」は「依頼」にのみで、「誘い」には使えない。従って、(13a)のような誤用が起こり易い。「誘い」の場合は、(13b-c)のような形を使わなければならない。

- (13)a. [椅子を勧めながら] #座って下さいませんか
- b. 座りませんか
- c. お座りになりませんか

同様に、英語母語話者は、“May I ...” は日本語では「～てもいいですか」に相当すると教えられる(Himeno 1991: 76-77)。しかし、“May I ...” (14a)は許可を求めるときにも申し出をするときにも使えるが、「～てもいいですか」は、許可要請にしか使えない。ここをはっきり教えないと、(14b)のような誤用が起こる。申し出の場合は、(14c)のような表現を使わなければならない。

- (14)a. May I help you?
- b. #手伝ってもいいですか

- c. 手伝いましょうか      ‘Shall I help you?’

## 7. 褒める

アメリカ人に比べると、日本人はあまり、人を褒めないと言われている。従って、日本人はアメリカ人が頻繁に発する褒め言葉に戸惑うことも多い。一方、アメリカ人は、日本人からの褒め言葉の少なさを物足りなく思うこともある (Barnland and Araki 1985: 25)。また、アメリカ人は肯定的な評言は「褒め言葉」と解釈するのが普通だが、日本人は「お世辞」(聞き手を喜ばせようとする、ついしょうぐち) と取ることが多い。

アメリカ人と日本人では、褒め方に多少の違いが報告されており、頻度を分析すると、以下のようなになる (Barnland and Araki 1985: 23)。

- (15) アメリカ人 : ① 容姿、② 能力、③ 人格、④ 好み  
日本人 : ① 能力、② 容姿、③ 好み、④ 人格

アメリカ人は、明瞭な褒め言葉を多用するが、日本人は、あからさまな褒め言葉の使用は躊躇する傾向にある。面白いことに、アメリカ人は親しければ親しい程、褒め言葉の頻度が高くなるが、日本人は、親しくなると、あまり相手を褒めない。一方、アメリカ人も日本人も、褒めたり、褒められたりすることを肯定的に捉えているという調査報告もあるが (Barnland and Araki 1985: 23)、「褒める」という発話行為はとても微妙で難しいものである。アメリカ社会でも、容姿に関する褒め言葉は、セクハラと取られかねない。いくら肯定的な評価であっても、踏み込んで (コメントしては) いけない領域があるということだ。

褒め言葉への対応の典型としては、以下の五つが挙げられる (Ishihara and Cohen 2010: 59-60)。

- (16)a. 受け入れる  
          ありがとう  
          私も気に入ってるの  
          うん、他のスポーツも得意なんだ
- b. 賞賛度を軽減する  
          旅行に行った時、買ったの  
          あなたのもステキ  
          ほんとにそう思う？  
          でも、かなり古いのよ  
          弟がくれたんだ

- c. 否定する
  - A: とっても元気そうじゃない
  - B: 最近、太ってきちゃって
- d. 意図される発話内行為を確認する
  - 使ってみたい?
- e. 何も言わない

日本人に関して言えば、90%以上の場合、自己称賛は避けるという報告がなされている。褒め言葉を容認したり、それに感謝するのは、5%に満たず、しかも、親しい者同士の会話に限られる (Daikuhara 1986: 119-20)。Daikuhara に因ると、最も頻繁な返答は、「いえ、いえ」や「そんなことはないですよ」といった否定表現 (35%)。次に頻繁なのは、「微笑を返す」や「何の返答もしない」(27%)、三位は、「本当にそう思う？」等の質問によって賞賛度を和らげる (13%) となっている。

褒め言葉を婉曲に拒絶するというのは、そういう習慣が希薄なアメリカ人にとっては、非常に習得しにくい技である。例えば、カリフォルニア大学バークレー校の中級日本語コースでは、窮余の策として、以下のような奇妙な対話が見られた。

- (17) A: [Bに戻ってきた宿題を見て] いい成績ですね  
B: いいえ、私は馬鹿です
- (18) A: いい靴ですね  
B: 中古を買いました

(17B)は、Aの賞賛を真っ向から否定しているので、気のきいた対応とは言えない。これでは、「あなたとは話したくない」とも聞こえてしまう。この場合は、「いいえ、まぐれです」あたりが最も無難であろうか。(18B)は、比較的ましである。もし、褒め言葉の対象が靴ではなく車ならば、こういう返答も如才なくていいだろう。しかし、対象がそんなに高価なものではない場合、中古というのは、日本人の感受性にはそぐわないのではないだろうか。勿論、いい物を安く買うことに誇りを持っている人もおり、(18)を自然な会話だと考える人もいるだろう。しかし、そう解釈する場合は、(18B)は、(16a)に分類されるところの「受け入れる」であり、辞を低くすることにはならない。

## 8. 最後に

この講演では、外国語教育に欠くことのできない、「スピーチアクト」(言語行為)という理論を紹介し、その典型例である、「謝罪」、「拒絶」、「感謝」、「命令」、「誘いと依頼」、「賞賛とその受け答え」について検討した。

話し手は、聞き手に対し、自分の考えを言語で表現する場合、字義通りの意味の伝達（発話行為）、その意図するところ（発話内行為）、その発話が聞き手に及ぼすだろう効果（発話媒介行為）を同時に遂行することになる。これは、極めて複雑な言語行為であり、その手法を習得するには、夥しい経験が必要である。それ故、話し手は、母語の運用で身につけた方法・手段を、外国語を使う際にも無意識にそのまま実践することが多々ある（語用論的転移）。それらの手段の多くは、外国語に於いても有効であるが、異文化間の相違が顕著に見られる分野でもある。この講演では、英語と日本語の発話内行為現象での相違に焦点を当てて考察してみた。

「謝罪」という発話内行為に関しては、最も顕著な差異は、日本語運用の場合の頻度が極めて高いということである。日本語母語話者は、英語運用上では全く必要ないと思われる場合でも頻繁に詫びるので、英語母語話者は異様に感じることもある。この講演では、日本人がものを聞く時に詫びがちな態度を示す根底には、人の移動が極めて限られていた封建制度の特徴であった、情報の希少性があるのではないかという見解を提唱した。

「拒絶」という行為は、どの言語に於いても、好ましくない対応であり、従って、様々な社交的技巧が駆使される。その殆どは英語でも日本語でも、円満な人間関係保持にとって有効だが、両言語間には微妙な差も認められる。その例として、英語では、聞き手との力関係が異なっても同じ表現が使われがちだが、日本語では、聞き手との力関係が発話形態に及ぼす影響が強いようである。

「感謝」の表現での日英の著しい違いは、日本語では、「詫び」の表現が頻繁に使われることである。物を借りるとき、「すみません」等と言う。しかし、「感謝」と「詫び」はいつでも代替できるものではない。例えば、「お元気になって、よかったですね」と言われた場合、「ありがとうございます」は適切だが、「すみません」は使えない。また、大恩を受けた場合も、「詫び」の表現は不自然である。

「命令する」場合、英語と日本語では、その表現に大きな差異がある。英語動詞の命令形は、「提言」や「忠告」、マニュアルやレシピ等での指導を含め、広範囲に使用されるが、日本語動詞の命令形は、使用できる状況が極めて限られている。容認される状況とは、話し手が聞き手より上位に位置し、聞き手の行動を規制する力がある場合に限られる。また、話し手と聞き手の間にはっきりとした力関係の差があれば、話し手は、命令形という強い表現を使わずに目的を達成することも容易であり、その方が望ましいと考える人も多い。

「誘い」と「依頼」は、共に、聞き手の行為を促すというスピーチアクトである。

「誘い」の場合は、聞き手が利益を受けるが、「依頼」の場合は話し手が利益を受けるという違いがある。英語では同じ表現が両方の発話内行為に使われるが、日本語では一方だけにしか使われない表現がある。例えば、「どうぞ」は「誘い」にのみ、「すみませんが」や「～て下さいませんか」は「依頼」にのみ使用される。

最後に、「賞賛」とその受け答えについて考察した。一般に、日本人はアメリカ人ほど人を褒めないと言われており、アメリカ人は褒め言葉を字義通り、肯定的に受け取るが、日本人は「お世辞」だと、否定的に考える場合も多い。また、日本人の場合、自己称賛は避ける傾向があり、褒め言葉を容認したり、それに感謝するのは、アメリカ人に比べると、まれである。これは、文化的な違いに根ざすため、アメリカ人が日本語を学ぶ際、褒め言葉への上手な応対は、ひととき難しいようである。

## 参考文献

- Austin, John. 1962. *How to Do Things with Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Barnlund, Dean, and Shoko Araki. 1985. Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology* 16 (1): 9-26.
- Beebe, Leslie, Tomoko Takahashi, and Robin Uliss-Weltz. 1990. Pragmatic transfer in ESL refusals. In *Developing Communicative Competence in a Second Language*, eds. Robin Scarcella, Elaine Andersen, and Stephen Krashen, 55-73. New York: Newbury House.
- Blum-Kulka, Shoshana, and Elite Olshtain. 1984. Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics* 5 (3): 196-213.
- Daikuhara, Midori. 1986. A study of compliments from a cross-cultural perspective: Japanese vs. American English. *Penn Working Papers in Educational Linguistics* 2 (2): 103-34.  
<http://www.gse.upenn.edu/wpel/archive/f1986>. [2012.12.26]
- Grice, Paul. 1975. Logic and conversation. In *Speech Acts*, eds., Peter Cole and Jerry Morgan, 41-58. New York: Academic Press.
- Haberman, Clyde. 1988. Some Japanese (one) urge plain speaking. In *The New York Times*. <http://www.nytimes.com/1988/03/27/world/some-japanese-one-urge-plain-speaking.html?pagewanted=all&src=pm>. [2012.12.26]
- Himeno, Tomoko 姫野 伴子. 1991. 依頼と勧誘: 受益者表現の日英対照を中心に. 『世界の日本語教育』 1: 69-81.  
<http://www.jpj.go.jp/j/project/japanese/archive/globe/01/06.pdf>. [2015.6.4]
- Ishihara, Noriko, and Andrew Cohen. 2010. *Teaching and Learning Pragmatics: Where Language and Culture Meet*. Harlow, Essex, UK: Longman.

- Lee, Nagiko Lee 凧子. 1998. 発話行為 (speech act) に現れる言語文化—日本語母語話者の特徴. 『立命館経済学』46 (6): 778-92.
- Ochs Keenan, Elinor. 1976. The universality of conversational postulates. *Language in Society* 5: 67-80.
- Seidensticker, Edward, and Kiyoshi Nasu E.G. サイデンステッカー, 那須聖. 1962. 日本語らしい表現から英語らしい表現へ. 東京: 培風館.